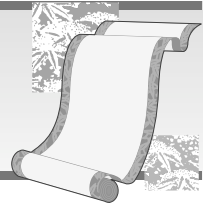


白拍子 祇王と仏の生涯

平家物語より

岡崎 嘉彦



『平家物語』の巻一に「祇王」という章がある。この章は権力の座に上り詰めた平清盛の非道さを描くために後から挿入されたと考えられているが、それだけに男性中心の社会で独立した女性として、また、国文学の愁嘆話の原型として貴重な位置を占めたものになった。

白拍子とは平安時代後期に流行した歌舞の一つで当世風の今様。それを歌い舞うことを職業とし、物腰柔らかい舞いをみせる女性も白拍子と言うようになった。

清盛が天下の権力を一手に握り我が世の春を謳歌していた頃、都で人気を博していたのが祇王・祇女という姉妹の白拍子であった。祇王は清盛に寵愛されて館を与えられ、祇女と母と幸せに暮らしていた。ある日、若い白拍子の仏が是非に自分の舞いを清盛に見て欲しいと清盛邸を訪れたが、そうそうに門外に追い払われてしまった。祇王は気の毒に思い「一度だけでも・・・」ととりなした。祇王の頼みということもあり、清盛は仏を屋敷に招き入れた。仏の舞いを見た清盛の心は仏に移ってしまい、清盛は仏に自分の所へ来るように命じた。仏は固辞するのだが、清盛は「それなら祇王を追放しよう」と祇王を追い出した。祇王はやむなく出て行くことになるのだが、名残惜しかったようで襖に以下のような歌を残して行った。

萌え出づるも枯るるも同じ野辺の草
いづれか秋に逢はで果つべき

里に戻った祇王はただ泣き伏すばかりであった。やがて、毎月の扶持も止められて生活は苦しくなり、変わって仏とその縁者が栄えるようになった。翌年の春、清盛から祇王のもとへ使者がやってきた。清盛は退屈している仏を慰めるために祇王に仏の前で歌舞を披露するようにいつてきた。あまりの屈辱に、祇王は行くことをためらうのだが、母に諭されてやむなく参上して舞うことになる。

出掛けた清盛邸で祇王は惨めな扱いを受け、かつての栄光とはかけ離れた自分の姿を思い知る。現実のうちひしがれている祇王に清盛は歌を命じた。

祇王は

仏も昔は凡夫なり われらも遂には仏なり
いづれも仏性具せる身を隔つるのみこそ
悲しけれ

と舞い踊り、人々の胸をうった。

人としての誇りを傷つけられた祇王は、帰宅すると「都にいればまた同じような思いをしなければならぬでしょうから、いっそ死んでしまいたい」と嘆くばかり。妹の祇女やそれを知った母も一緒に死ぬと言う。祇王は親不孝が出来ないと死ぬのを思いとどまり、髪を下ろしたのである。

翌年の秋、三人が念仏を唱えていた夜更け、戸を叩く音に出てみると尼の姿になった仏が立っていた。仏は今迄自分が現世に虚しさを感じているのを伝え、一緒に念仏を唱え後生を願いたいと熱心に頼んだのである。

祇王はそれを受け入れ、祇王一家と仏は日夜余念なく仏道に励み、みな往生の本懐を遂げた。これが清盛をとりまいた祇王たち白拍子の生涯である。

『平家物語』の登場者のほとんどが高位高官であるなかで、彼女たちは身分の低い白拍子であった。民衆はそこに自分たちと共通の身分の女性の心苦しみを思い、ひとしお涙をそそったのではないか。しかし、彼女たちは貴族に先立って現世の栄耀のはかなさに気づき、仏教に帰依して静かに生涯を遂げ、平家滅亡の渦に巻き込まれることを免れ、時代と共に生き抜いていった女性達といえるだろう。

その美しさ故に、紫陽花の花の如く移ろう権力者の心に翻弄された祇王の章は『平家物語』にあって、人の身に起こる栄枯盛衰を悲しく伝えたものであった。

主な参考文献　そして、今回おすすめする図書
宮尾登美子著『平家物語の女たち』朝日新聞社 2004年。
永井路子著『平家物語の女性たち』文藝春秋 1979年。

おかざき よしひこ(司書・情報サービス課)